

論文内容の要旨

氏名	OHASHI Kanae (大橋香苗)
論文題目	A Study on Pronunciation Instruction for Japanese Learners' Acquiring Global Intelligibility: From the Viewpoint of English as an International Language (日本人学習者が Global Intelligibility (国際的な明瞭性) を獲得するための発音指導に関する研究: 国際語としての英語の視点から)
要旨	
<p>英語教育における発音指導においては、伝統的に学習者の発音をネイティブスピーカー (以下 NS) の発音に可能な限り近づけることが推奨されてきた。しかし、グローバル化が進み英語が様々な言語背景を持つ人々の間で共通言語になった現在では、NS のような発音ではなく 1956 年に Abercrombie が述べた “comfortable intelligibility” (心地よい明瞭性) のある英語が学習者の目指すべき目標であるという見解が研究者たちの共通のものとなってきた。発音の intelligibility (明瞭性) の厳密な定義に関しては様々な見解があるが、本研究においては「話し手が意図した形で発話が聞き手に認識される度合い」であると考えたい。本研究は、国際的な対面オーラルコミュニケーションにおける発音の重要性、特に国際語としての英語 (English as an international language) における global intelligibility (国際的な明瞭性) のある発音の重要性を認識するところから始まり、global intelligibility に貢献する要因の分析を立脚点として論を展開した。本博士論文の構成は、以下のようになっている。</p> <p>第1章 序論</p> <p>《第1部》概要</p> <p>第2章 発音指導の歴史と発音研究</p> <p>第3章 日本の英語教育における発音指導</p> <p>《第2部》理論</p> <p>第4章 国際語としての英語</p> <p>第5章 英語発音指導と intelligibility</p> <p>《第3部》リサーチ</p> <p>第6章 日本人大学生の発音知識、学習経験、発音に対する態度についての研究</p> <p>第7章 日本人学習者の global intelligibility に影響する要因について研究</p> <p>第8章 日本人学習者の global intelligibility を改善する文レベルでのストラテジーについての研究</p> <p>第9章 結論</p> <p>第1章では、発音の対面コミュニケーションにおける重要性、グローバル化に伴い英語が国際語となったことから global intelligibility のある発音を目標とするべきで</p>	

あるという研究背景を基に、論文の目標として以下の3つをあげた。

- (1) global intelligibility に貢献する要素に関しての理論的枠組みを組み立てること。
- (2) 日本人大学生の英語発話を英語の NS とノンネイティブスピーカー (以下 NNS) 双方の視点から分析することを通し、日本人学習者の英語の global intelligibility に貢献する要因を調査すること。
- (3) 先行研究と本研究で得られた結果を基に、日本人学習者の英語発音の global intelligibility を保証する教育的指針を示すこと。

これらの目標に沿って、第2章以降、3部に分けて議論を展開した。

第2章 (ここから第1部) では、外国語教育における発音指導の位置づけが示された。19世紀初頭まで書き言葉は話し言葉よりも優先され、結果として発音は重視されなかった。しかし、1850年代になると、話し言葉は書き言葉より優先的に指導されるようになり、この頃現れた Direct Method では発音は指導の初期から優先的に教えられた。さらに、1850年代に音声学者たちが発音を科学的に分析し、国際音声記号の開発を伴う Reform Movement が起こり、正確な発音や発音指導に対する関心はますます高まった。Audio-Lingual Method の繁栄が終わった後、発音指導への関心は一時停滞したが、発音指導とその研究に対する関心は1990年代の終わりから現在に至るまで高まり続けている。そして、それに伴い第二言語/外国語発音と発音指導に関する研究の数も増えてきている。しかし、発音指導や発音研究は未だ新しい研究領域である。現在では、発音指導の目標は intelligible な発音であることが研究者たちの間で共通の見解となっている。そして、研究テーマの一つとして何が発音の intelligibility を構成し、intelligible な発音のためには何を教えるべきかという課題も提起されている。

第3章では、日本の発音指導の現状が述べられた。中学校の学習指導要領では、過去60年の間に発音の指導内容はより具体的に改訂されてきた。また、教えられる発音は「現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音」であると1969年までは規定されていたが、1977年の改訂版では「現代の標準的な発音」に変更された。これは、従来の英語教育において一般的だった目標—NSの発音になるべく近づける nativeness principle (ネイティブ原理) (Levis, 2005)—からの脱却を意味している。さらに、中学校の検定英語教科書と大学入試センター試験の発音問題の分析から、発音指導は日本の英語教育においては相対的に不十分であることが判明した。

第4章 (ここから第2部) では、国際語としての英語を歴史的経緯と現状から概観した。英語は16世紀末には500万人から700万人の数のイギリス諸島の住人に話されていた一言語であったが、現在ではいわゆる Outer Circle の第二言語としての話者も含めると世界中にその話者はおよそ6億2000万人から8億8000万人にも昇ると言われている (Crystal, 2003)。英語使用は国境、民族や文化的境界を越え広がり続けており、NSとNNSの比率は1対3であると推計されている。国際語としての英語が異なった母語と文化背景を持つ人々にとっての共通語であることを考えると、英語が国際語として機能するためには、お互いにとって intelligible である必要がある。英語

には様々な変種があるが、書き言葉は変種によってそれほど異ならない。しかしながら、話し言葉はお互いに理解できないものになるほどそれぞれが異なっている。国際的な対面でのコミュニケーションにおいては intelligibility のある発音は必須である。したがって、国際語としての英語における発音の intelligibility に関するさらなる研究が必要とされている。

第5章では、先行研究をもとに intelligibility 研究の枠組みを示した。研究者の間で intelligibility に関する一致した定義はまだないが、音声面での intelligibility はオーラルコミュニケーションが成立するための根本的な必要条件であることは研究者の間でも一致した意見である。本博士論文は、intelligibility を、話し手が伝えようと意図した通りに聞き手が認識する度合いであると定義し、発話の意味解釈には広がっていない。

現在までの多くの intelligibility 研究は、多くの場合 NS の視点に焦点を当ててきたが、国際語としての英語を意識した最近の研究では、NS の聞き手にとってはイントネーションや語アクセントなどの超分節音が重要である一方で、NNS 同士のオーラルコミュニケーションにおいては分節音の正確さがより重要であるということが示されている。

日本人の学習者の intelligibility における研究も、数は少ないが NS と NNS 双方の観点から行われたものもある。明らかになったことは各研究によって様々であるが、NNS の対話者にとっては分節音がより重要な要素であることは一致している。NS、NNS 双方とのコミュニケーションに従事する際に必須である日本人話者の global intelligibility を保つために最低限必要な「コア」(核)となる要因がどのようなものであるかは、まだ明らかにはされていない。

第6章(ここから第3部)では、日本人大学生の英語発音に関する現状を理解するために、彼らの英語発音に関する知識と学習歴、発音に対する意識についてのアンケート調査が行われた。その調査から次の3点が明らかになった。一つ目は日本人大学生は一般的に中学、高校で発音学習を受けた経験が少ないことであり、二つ目はその結果として十分な英語発音の知識がないこと、また三つ目は発音学習歴、知識と英語発音に対する態度は互いに関連していることである。

第7章では、日本人学習者の発音の intelligibility を NS と NNS 双方の観点から調査した。ここでは intelligibility に影響する要因として7項目が上げられた。①分節音(子音と母音)、②単語アクセント、③文ストレス、④文の区切り、⑤イントネーション、⑥リズム、⑦流暢さである。調査では、日本人学習者の発音が以上の7つの観点から NS、NNS 双方の評価者に評価された。結果として、NS、NNS 双方の評価において文ストレスには全体的な intelligibility と有意な相関が見られた。この結果は、国際的に intelligible な発音つまり global intelligibility を指導の目標としたときに文ストレスを重視する必要性を示唆している。

第8章では、文ストレスに焦点を当てた明示的な発音指導と文ストレスを視覚的に目立たせた提示が日本人英語学習者の全体的な発音の intelligibility を向上させるかを

検証した。この研究では、20人の日本人学習者を統制群と実験群の2つのグループに分けた。実験群には、文ストレスに関する明示的な指導に続き、文ストレスを視覚的に目立たせたスライドが提示された。そのスライドを音読したものを録音し、音声データとして活用した。統制群にも同じ文章のスライドが提示されたが、明示的な指導と文ストレスを視覚化したものは提示されなかった。統制群が音読した音声を録音したのも音声データとして活用した。録音された音声データは、二人の NS 評価者によって intelligibility の観点から5段階のリカート尺度(5件法)で評価された。 t 検定の結果、実験群と統制群の intelligibility 得点間に有意な差が見られた。この結果は、学習者の全体的な intelligibility を向上させる上で文ストレスに焦点を当てた指導の有効性を示すものであると言える。

第9章では、本研究の結論として主に2つの教育的意義が示された。第一は、発音指導はもっと重視されるべきであるということである。そのためには、カリキュラムや教科書、大学入学試験など、我が国の英語教育の枠組みそのものが見直される必要があるだろう。また、英語教育に関わる研究者や教員が発音指導の目標は intelligible な発音であるということを確認することも重要である。第二は、文ストレスに焦点を当てることは日本人学習者の global intelligibility の改善につながるという研究結果から、日本の英語教育、特に発音指導において文ストレスのような超分節的項目をより重視する必要性があるという提言である。英語発音の多くの項目の中で、文ストレスは比較的教えやすく、かつ日本人学習者の global intelligibility を維持・向上させるものであると考えられる。したがって、そのような項目をさらに科学的に見極めることが重要であろう。

本博士論文にはいくつかの改善すべき点も存在している。第一に、第7章での intelligibility に貢献する要因を見極める研究手法に関してである。より正確な結果を得るためには、評価者が intelligibility をリカート尺度で評価し、得点化する方法だけでなく、書き取りタスクや理解タスクなどの他の手法の活用も必要であろう。また、音声分析ソフトなどでの音響的分析も有益であろう。第二に、研究の規模、特に参加者の数と研究3(第8章)での指導の期間に関してである。指導法の有効性を実証するためには、より長い期間にわたっての指導が必要であり、一定の期間をおいてから学習者の intelligibility を測ることも重要である。今後、global intelligibility に貢献する要因をさらに厳密に見極め、また効果的な指導法の探求のために、様々な研究手法を使った多角的なアプローチが必要であると思われる。




論文審査の結果の要旨

氏名	OHASHI Kanae (大橋香苗)
論文題目	A Study on Pronunciation Instruction for Japanese Learners' Acquiring Global Intelligibility: From the Viewpoint of English as an International Language (日本人学習者が global intelligibility (国際的な明瞭性) を獲得するための発音指導に関する研究: 国際語としての英語の視点から)
要旨	
<p>本論文は、対面形式で行われる英語でのオーラルコミュニケーションにおける発音の重要性、特に英語を英語母語話者の言語としてではなく、英語母語話者も含めて世界中の異なる文化を背景にもつ多様な人々によって使用される国際語としての発音に求められる intelligibility (明瞭性) つまり global intelligibility (国際的明瞭性) の重要性の認識を出発点とし、その global intelligibility に貢献すると思われる発音上の要因を、実験的手法を用いて特定し、その要因に特化した発音指導の教育効果を、日本人英語学習者を対象にした実験で検証した労作である。以下、本論文に関して特筆すべき点を3点述べることにする。</p> <p>第一に、外国語学習者の英語発音に求められる intelligibility を国際語としての英語という観点から捉え直し、英語母語話者に加えて非英語母語話者に対して英語を使う場合に求められる global intelligibility という概念を提案した点にある。我が国の学習指導要領では、日本人英語学習者が目標とすべき英語発音が、「現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音」(1958年改訂版)から、「現代の標準的な発音」(1977年改訂版以降現行版まで)と変遷を遂げてきたが、日本人英語学習者にとっての目標が必ずしも明確に規定されていない。発音指導の研究者の間では、伝統的に native-like な発音ではなく intelligible な発音が、外国語学習者が目指すべき発音として考えられてきたが、その場合にも英語母語話者にとって intelligible な英語発音が想定されている場合が多い。しかし、今日英語は英語母語話者だけの言語ではなく、異なる文化背景を有する多様な人々によって使用される国際語である。本論文は、その観点から日本人英語学習者が目指すべき英語発音は、global intelligibility を有する発音であるという主張を提示している。</p> <p>第二に、global intelligibility に貢献すると思われる要因を先行研究から抽出し、英語母語話者4名と非英語母語話者4名を評価者として、日本人大学生6名による英語発話を抽出された要因ごとに5件法で測定し、その結果を重回帰分析を援用し、抽出された要因の相対的重要性(貢献度)を算出した点にある。調査の対象となった要因は、分節音、単語アクセント、文ストレス、トーンユニット、イントネーション、リズム、流暢さの7要因であったが、英語母語話者による intelligibility の評価では文ストレスとイントネーションの貢献度が有意に高く、一方非英語母語話者による評価では分節音と文ストレス貢献度が有意に高いという結果が得られた。</p>	

第三に、intelligibility に貢献する7つの要因のうち、英語母語話者による評価と非英語母語話者による評価の両方において貢献度が有意に高かった文ストレスに着目し、その明示的指導の教育効果を検証した点にある。具体的には、被験者である日本人大学生20名を実験群と統制群に分けた。実験群には、文ストレスの教育効果を検証するための方策として、文ストレスを視覚化した教材をもとに発音訓練を施したのちに、問題文として提示された一連の英語文を発音するように指示した。一方、統制群には実験群に施されたような文ストレスを視覚化した教材をもとにした発音訓練を施さずに、実験群に提示されたものと同じ英語の問題文を発音するように指示した。被験者の発音を録音した音声データをもとに、英語母語話者2名(アメリカ人とイギリス人)がその発話の intelligibility を5件法で評価した。その際、評価者には、評価の対象となった音声データが実験群のものか、統制群のものかは分からない状態で、intelligibility を評価するように求めた。その結果、事前に文ストレスを視覚化した教材をもとに英文の発音練習を受けた実験群の intelligibility の評価値が、その種の発音練習を受けていない統制群の intelligibility の評価値より、統計的に有意な差でもって高いという結果が得られた。1回の実験結果で得られた結果であり、過度の一般化は避けなければならないが、文ストレスに焦点を当てた発音練習の教育的効果が期待できることが判明した。

今後の研究課題としては、本論文で行った文ストレスに焦点化した発音指導を長期にわたって展開し、その教育効果をより厳密に検証することが求められるとともに、global intelligibility を保証する他の要因(語彙や文法)も視野に入れて研究の幅を広げることが求められる。研究者ならびに実践者としての飛躍が期待される。



審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	伊東 治己 
副査	教授	鈴木 誠一 
副査	教授	岡田 伸夫 

最終審査の結果の要旨

氏名	OHASHI Kanae (大橋香苗)
試験科目	
判定	合格 ・ 不合格
要旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し、審査するために、博士論文を中心に口述試験を実施した(2021年1月28日)。</p> <p>申請者は、本研究の時代的背景や今日的意義を明確に述べるとともに、論文の主題となっている国際語としての英語の視点からの global intelligibility (国際的明瞭性) について研究するための理論的枠組みを十分に体得し、それに貢献する要因を綿密に準備された実験的調査をもとに特定した。さらに、その調査から特に有望視された要因(文ストレス)の明示的指導が日本人英語学習者の global intelligibility を高めうることを、実験的手法を用いて検証した。申請者は上述の口述試験において、以上の学問的知識と研究能力を背景に、論文内容に関する理論面、実践面の質問に対し、明確かつ確に答えることができた。加えて、口述試験で指摘された論文に含まれる問題点についても真摯に回答し、今後の研究に活かして行く方策も提示した。なお、本論文の一部は、外国語(英語)教育関係の学会誌にも掲載されており、この点から見ても、本博士論文は英語教育学に求められる学問的水準に十分達している。申請者の外国語試験については、英語で執筆された本論文とフランス語による論文要約における高い表現力から判断し、試験を免除した。</p> <p>以上の諸点を総合的かつ慎重に判断した結果、審査委員会は全員一致で申請者への博士(英語教育)の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	伊東 治己 
副査	教授	鈴木 誠一 
副査	教授	岡田 伸夫 